

6、やさしさを求めて

私の故里愛媛県長浜町は、県下最大の流れ肱川河口に位置する港町である。その昔、大州藩主加藤貞泰が、この河口の入江を利用して港を構築し、ここに藩主の乗船駒手丸を繋留するようになってから急速に発展した。いまは、入江の大半を埋め立てしまったが、江湖、駒手町の町名が往時を偲ばせている。

私の子供の頃、江湖と呼ばれていたこの入江は貯木場利用されていたが、それはそのまま、腕白坊主の格好の遊び場でもあった。海水に浮ぶ筏や材木の上を、義経の八艘跳よろしく跳び渡って遊ぶのである。

あれは、小学校の二年生になったばかりの端午の節句の夕暮れどきであった。母親がマキの葉でかしわ餅を作ってくれている間に、ひとりて江湖へ出か



昭和54年 蒜山国民休暇村での研修

けていった。いつものように海水に浮ぶ材木の上で遊んでいたところ、思いもかけず乗っていた材木が沖へ流されてしまった。岸边へもどるすべもなく日は暮れるしで、とうとう泣いて助けを求めた。事の急を知った父親がとんできて、着の身着のまま海水に飛び込み助けてくれた。この時程、父親を頼もしく感じたことはなかった。が、岸边につくや、「この馬鹿もん！」と一喝された。しかし、その厳しい口調の中にもやさしい慈愛を感じた。母親も心配して駆け付けていたが、小言一ついわず、家に帰ると濡れた服を取り替えてくれながら、「かしわ餅たべる？」といった。この温かい一言にはじめて生気をとりもどしたが、また、そこにやさしい慈愛を感じ、再び泣きじゃくった。

今年の統一テーマは「やさしさを求めて」である。やさしさとは、決して猫かわいがりのやさしさや、相手の関心をひくためのやさしさであってはならない。そこには、功利的打算の心が潜んでいると思われるからである。真のやさしさとは、利を捨て算盤勘定をしない慈愛の心から生れるものである。やがて人の母親となる諸姉は、両親から享けた慈愛を、そのまま我が子にそそぎ、隣人にも施さねばならないと思う。やさしさ、それは、その慈愛の中にこそ求められるからである。

第十八回大学祭パンフレット(昭・59・10)